

偶感あれこれ

3 はるかなる「満洲」のこと

佐々木宏幹 駒澤大学名誉教授

仏教企画通信

発行日 | 平成29年3月1日

47号

発行所 | 有限会社 仏教企画
〒252-0113
神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5
Tel.042-703-8641
Fax.042-783-0989

発行人 | 21世紀の仏教を考える会代表
佛仏教企画代表 藤木隆宣

Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

「トウジンさん」

齢八十をすぎると先がないせいか、自分に限って言うとしきりに「過去のこと」が脳裏に浮かんで消え去ることが少なくない。「過去のこと」と言っても、私の場合は物心が付いた昭和十年頃から二十年頃のことととりわけ懐かしく思い出される。小学校に入学したのが昭和十二年(一九三七)で、昭和二十年(一九四五)には旧制中学校の三年生であった。言うまでもなく昭和二十年は太平洋戦争敗戦の年である。この年に日本の運命が激変したことは周知のとおりである。

私は寺に生れ育ったが、「お寺」には檀家の人たちだけがよく出入りしていた。今だに忘れられないのは、はるばる富山県からやって来る薬売りの人である。毎年冬から春にかけて富山の薬屋さんはやってきた。紺色の大きな風呂敷包みの中にはさまざまな薬品が詰められてあった。薬屋さんは「トウジンさ

ん」と呼ばれていたと記憶しているが、漢字ではどう書くのであろうか。「東人」「東國の人」ではなからうし、「党人」でもなし。あるいは「唐人」であるかどうか。唐人は中国人・外国人のことであるから「トウジンさん」は、「遠くから来た人」のことであつたらうか。「遠方」の語は「とおい方」、「遙かなところ」、「遠方」を意味するから「トウジン」は「遠人」のことかもしれない。トウジンさんは毎年紙風船をお土産にもって来てくれた。風船に息を吹き込んで突き上げる遊びは忘れられない。このように子供にとっては実に懐かしい想いを残してくれた時代であつたが、この国にとつてはとて深刻な事態が生じていた。「満洲事変」の勃発である。

満洲事変とは？

満洲事変とは、先行研究によると昭和六年(一九三一)九月八日、満洲(中国東北部一帯)の奉天(現在の瀋陽)北方に位置する柳条湖の鉄道爆破事件を契機とする日本の中国侵略戦争であるとされる。いわゆる十五年戦争の第一段階であり、翌七年(一九三二)には満洲国が樹立された。この年も清国の宣統帝であつた溥儀を執政として建国した国家で昭和九年(一九三四)溥儀は皇帝に即位し首都を新京(現長春)とした。昭和二十年(一九四五)八月の日本の敗戦により満洲国は消滅した。満洲

国はわずか十三年間だけの国家であつた。さきの話に戻ろう。私が「トウジンさん」から紙風船を貰っていた頃、お寺の檀家の若者の中に「満洲に行った(あるいは行く)」という大人たちの話をよく耳にした。多くは農家の二・三男だつた。お寺の近くに家のあつたT男さんは元氣澆刺とした若者で、常に遊び仲間の大将であつた。当時の農家は広い土地を持つ地主と、その一部を借りて耕す小作人とに別れていたが、T男さんは小作人の二男であつた。小作人の二・三男は「口減らし(家計が苦しいので家族の者を他へ奉公に出すこと)」のため主に都市部その他に出稼ぎに行つた。T男さんも出稼ぎに行つたが、その地が満洲であつた。満洲なる地が遠い遠いところであることは子供心にも何となくわかつていた。T男さんは「満蒙開拓義勇団」の一員として満洲に旅立つた。それっきり帰って来なかつた。

当時代の研究によればこの義勇団は満洲事変後に、日本から中国東北部に送りだされた農業移民団で、満洲国維持の軍事目的と国内農村の窮乏の緩和を目的としており、総数は三十万人以上に達したが、昭和二十年(一九四五)八月のソ連(現ロシア)の参戦によつて潰滅し、多大の犠牲者を出し、また残留孤児を生んだとされている。私は一九九九年の八月に旧満洲の北西部のハイラル近郊で開かれた国際学会に出席したが、果てしない大草原の彼方に沈む太陽を目にして、ふと「T男さんはこの大地のどこかに！」と感じ入つたのであつた。

現実とは違つていたのだが、当時の満洲は日本の地方では美化されて受けとられていた。私が子供の頃にお姉さんたちが歌っていたのを耳にして今も覚えている歌がある。「私や十六満洲娘 春よ三月雪解けた インチュウホワ(向天花)が咲いたなら お嫁に行きます隣村 王さん待つて頂戴ね」というものである。インチュウホワとは黄梅のことだという(須藤清美さんの教示による)。何ともロマンチックな歌である。この歌は「満洲娘」という名で、昭和十三年(一九三八)十一月に発表されたもので、作者は石松秋二氏である。この歌を歌つていたお姉さんたちも自分たちがやがて隣村や町にお嫁に行くだろうことを、それぞれの胸に秘めていたのかもしれない。実際、お姉さんたちが一人また一人といなくなると、そこはかとなく寂しさを感じたものである。

日本人と満洲

話は前後するが、私が「満洲」について書くこととしたきっかけは、雑誌『文藝春秋』





藤田一照(ふじた いっしょう) 国際布教師、翻訳家、曹洞宗国際センター所長、藤田一照仏教塾主宰

ヤブレンですといつて、そこを出れば普通の教会の牧師に戻るというふうな、そういう資格の認定制度なども参考にしながら、日本流のものをつくっていかねばと思っております。

「臨床宗教者」と「臨床宗教師」についても、実は議論があつたところで、最終的に岡部先生が「師」と決めた。恐らく先生は高度な専門職をイメージされていて、つまり医療者や介護のプロフェッショナルと同等に付き合えるような、そのような専門職を指すという強い意志の表れとして、「臨床宗教師」とされたのではなかったか。今振り返って、そのように思っております。

さまざまな臨床宗教活動

島菌 私は宗教学者ということで、今は死生学の教育が主な仕事になっております。そういう立場からお話させていだきたいと思っておりますが、今のお話が続けますと、臨床宗教的な活動というものと臨床宗教師という資格とを少し分けて考えてみたいと思うんです。臨床宗教者といった活動は昔からあるといえはるし、

本来の仏教者の活動はそもそも臨床的な活動だったというふうにおっしゃる方もおられます。それが新たにこういう自覚を持つて行こうということになってきたの

は、伝統的な宗教と一般社会の間に少し距離が感じられるという中で、新たにその距離を縮めていくという、こういうふうなことが必要だと考えられてきたからではないかなと思っております。

西洋のホスピス運動、これも日本の臨床宗教師運動と似たところがあるところがあると思っております。そういふふうにご検討を考えますと、先ほど久保田さんのお話にもありましたが、私も東日本大震災で曹洞宗青年会の方々とか何度被災地へお邪魔いたしました。お話を伺うと、青年会の中にボランティア講座があり、そういう講座の必要性を自覚されたのは、恐らく一九九五年の阪神淡路大震災がきっかけになり、その後、二〇〇四年の中越地震とか二〇〇七年の能登沖地震とか、支援活動にぜひ参加したい、赴きたいという、その中でやはり研修が必要だという自覚が育ってきたということだと思います。

それからビハラということになりまして、長岡西病院にビハラ棟ができたのは一九九三年ですが、田宮仁さんという真宗にご縁のある方が提唱され、ご兄弟が医師で長岡西病院に関係していらっ

しゃるということで、この病院がこういう地平を開いたということは大きいと思えます。ほかにもいろいろ活動があり、宗教ベースのさまざま支援活動があります。さらに自死遺族、あるいは自死念慮者の支援というの、この二十年あるいは三十年ぐらいい間に仏教界として取り組む姿勢が非常に増えてきました。これは社会の中の苦しい人たち、つらい立場にある苦の現場というものに伝統的な寺院活動からは一歩踏み出して活動する必要があると考えている、そういう大きな流れがあると思えます。

臨床宗教師養成講座の基本科目

増田 今回の開かれた場という点ですと、ほんやりしている私どもから見ると、一体どういう講座の内容で、何を学ぶのだろうかというふうなことがよく見えないわけですね。もう一つ、実はそれを学びたいという周囲にもおまして、話を聞いてみると、その内容が密度濃く、自坊のことなり、自分の仕事を横に置いておいて行かないと学べないという。学びたいけれどもちよつと無理かなという、四十年代、五十代ぐらゐの結構燃えている方々の中に、そんな反応があるようなんです。

島菌 伝統宗教と一般社会に少し距離ができた、あるいは苦しみや悩みの現場とお寺との間がくつつきにくなつてきている、これは僧侶の努力が足りない面ももちろんあると思えますが、社会が変わつてきたためにうまくいかなくなつて

これがしかし、これに関わっておられない方から見ると、非常に大事なところが、何だか怪しい者によつて進んでいくというちよつと言い過ぎですが、よく分らないところ、見えなところ、進んでいく。そういう印象を持たれることになるかもしれない。ですから今回のような、こういう機会を通じて実像をよく分かつていただいて、できるだけ開かれた共有の場にしていく。いいなと思っております。

二つ目は、もちろん苦しんでいる人の背景には社会構造や、文化、風土という様々な背景がありますので、社会全体・文化全体を知らない、その人の語る物語というのはきちんと受け止められない。ですから、文化・風土とか社会制度とか、その人の後方を支えていることについて学ばなければならぬのです。

三つ目は、その上で、これは当然、同時進行になります。まず宗教者の立場をきちんとしておかないといけません。自分自身のことです。自分のよって立つべき信仰に対してストイックでなければいけないと思えます。様々な現場に行きますと、現実の重さによつて逃げ出したくなることもあるでしょう、しかし、その場に留まる力といえますか、慈悲の力といえますか、信仰の力が養われたい、スピリチュアルケア師にはなれるけれども、臨床宗教師にはなれない、そう思います。

四つ目は倫理綱領を学び、そして遵守するという点です。私達が一番大切にしている点です。私達は倫理綱領を作り、臨床宗教師の訓練や、実際の現場で遵守されているかどうかを検討する倫理委員



藤田一照(ふじた いっしょう) 国際布教師、翻訳家、曹洞宗国際センター所長、藤田一照仏教塾主宰

会も作りまし。まためまると、講座の基本的内容は、自分自身を知り、相手に対する傾聴能力を高める、背景にある社会・文化を知る、倫理綱領を学ぶ、自身の信仰を深める、そして、他の宗教の人たちと協働できるようなスキルを身に付ける。もちろん宗教だけではなく、協働する機関、例えば、医療・福祉関係、また被災地では被災地の事も学ばなければなりません。

そして何より大切なのは現場実習です。座学と現場を往復しながら学びを深めていきます。現場での学びは会話記録検討会などで、問題点を他の受講者と話し合い、共有していきます。この様な内容を基本に養成プログラムを進めております。

宗教者としての情熱に火をつけよう

藤田 臨床宗教師という場合は、僧侶とか牧師ということがそこに一つ条件として入ってくるわけですね。臨床心理士でもないし、看護師でもない。臨床というのには一人でやるものではなくて、お医者さんや看護師さん、また心理的なことをやる人とか、ソーシャルワーカーとか、そういう人たちがたくさんいます。彼らのカバーできる領域ではないような、隙間のようなところに、スピリチュアルな宗教的なベースを持つている人が必要とされている。そういうことですか。

これを出てきているのではないだろうかというふうには思っています。実は私自身も藤田さんと似て、父親が精神科医でして、精神医学をやろうと思つて大学へ入つたのですが、どうも医療では人は助からんのではないか、自分も納得できないだろうと思つた。医学の勉強をしても、数学をやつたりカエルの解剖をやつたり、これで大丈夫かなというところで、まず自分自身をしつかり確かめたいというところで、禅寺に入るほど勇気がなかつた。でも、それから、宗教というところへ入つた。それは一九七〇年ごろの話ですけれども、大事なところが抜けていると感じたわけですね。

島菌 伝統宗教と一般社会に少し距離ができた、あるいは苦しみや悩みの現場とお寺との間がくつつきにくなつてきている、これは僧侶の努力が足りない面ももちろんあると思えますが、社会が変わつてきたためにうまくいかなくなつて

いたでいるという感じですね。日本の人たちにとつては、お坊さんがそこにいるというものは、その人だけではない。その後ろにある仏教の伝統的なもの、全部集約した形で見ると、そういうふうに見られている。金田 自分たちの深いスピリチュアリティに結び付く何かがある、というふうに理解されていると思うんです。藤田 それは簡単には作れませんね、所定のプログラムをこなす程度のことでは。金田 そういうことに宗教者自身が気付いていない場合もあります。第一回目の臨床宗教師の研修のとき、一番先に行動から始めました。浄土真宗、立正佼成会、キリスト教の方々が大川小学校前の堤防を歩いたのです。そうしたら復興事業に携わつていた人たちが、立ち止まつて手を合合わせるんです。自分たちはそういう存在なんだ、それで宗教者としてのスイッチが入つた。日本の仏教者、宗教者は歩かなくなりまして、ね、歩いて破れ衣をさらすというのをしなくなつてしまつた。

増田 今、同じ問題意識の中にあつた。ちよつと話を広げますけれども、私どもは不登校の子どもであれ、かつての荒れる学校であれ、家庭崩壊であれ、そのことに真剣に立ち向かつているその場は全て臨床だと思つています。剣に立ち向かうことが少ない

宗教師には祈りの力がある

島菌 伝統宗教と一般社会に少し距離ができた、あるいは苦しみや悩みの現場とお寺との間がくつつきにくなつてきている、これは僧侶の努力が足りない面ももちろんあると思えますが、社会が変わつてきたためにうまくいかなくなつて



久保田永俊(くぼた えいしゅん) 千葉県中瀬寺副住職、曹洞宗総合研究センター専任研究員、祈りの集一自死者供養の会一担当

ているという面も大きいと思えます。つまり、昔はお寺の中に人の集まる場所があつて、お互いの悩みを話し合つた。自然があつた。そういう環境があつた。けれども、今はそういうものが少なく持ちにくくなりました。ですから、私は宗教に対する敷居が高くなつていくと思う。

敷居が高いというのは、お寺の中に入つて行きにくいとか、立派な伝統があるからかえって近づきにくいというのもあるし、その後に出てきた在家教団なども、家庭集会を持つたりしますが、これも外の人が入りにくいものになつていく。集団の中に入るといふ、そういう宗教の在り方がそもそも近づきにくくなつていくわけですね。逆に人が悩むときに集まる、あるいは悩みを明かす場所というの、そういうものがまた新たに出てきている。その環境に合わせて宗教活動のスタイルが変わつていくので、何がかわつていくのかという、一番中心なのは、こちら側の土俵に来てもらうのではなくて、それぞれ拾い上げる。私はホームとアウェーというたとえをよく使つて説明しています。

金田 私もお寺を出る、そして、苦しみの現場を感じ取る力を養い、苦しみの現場というものは与えられるものじゃない、自分で探すものだ。そういうことを続けているうちに、次第に、悲しみとか苦しみを背負つた方々から寄つてくる。それが宗教者の本来の姿であり、そこに佇んでいるだけで向うから寄ってくるものなんです。そこまでやりなさいということ。増田先生の言われる感性の問題というのは、これは学んで学べるようなことではないですね。本当に切に他を思う心、これはお釈迦様が最初に、修行の第一歩を踏み出されたのも「目」よりもむしろ「他」への問題だったわけですね。全ての始まりに慈悲の「慈」があり、「慈」が全てを回転させる、そういうことだと思えます。ただどうにもならないこと

です。私達の傾聴活動も最初は「慈悲の心」からだつたといえるでしょう、ところがどうにもならない問題、例えば、遺体が見つからない、一人が家族三人も四人も失つて表情すらないような人に対して向き合つて、どういふ答えがあるのか、どのように接したらいいのか迷つてしまふ、これは「悲」ですよ。でも、宗教者はそこに留まり続けなければならぬ。宗教者には、

仏教企画通信

ご支援寺院名
H28.8.1~9.30

Table with 3 columns: 所在地, 寺院名(個人名), 金額. Includes entries for 山梨県 興隆院 (10,000) and a total of 10,000.

手まり学園

寄附者御芳名
H28.8.1~9.30

Table with 3 columns: 所在地, 寺院名(個人名), 金額. Lists various donors and amounts, totaling 264,000.

「手まり学園だより」第9号の8面に平成28年度給食・物品寄付者のなかで間違いがありました。山室直儀・貴子(東京都)、龍溪寺婦人会(千葉県)が正しい表示です。お詫びして訂正いたします。

(*部数により割引があります) すべて税別価格です

仏教企画発行の刊行物

- 『修証義』解説 丸山劫外著 1,400円★
『うたい継ごうよ、子守唄』 長田暁二・西館好子共著 1,200円★
『まんが問答一期一話』 文 平和宏昭 まんが 垣内敬遠 1,200円★
『道元禅より見たる般若心経解説』 長井龍遺著 2,200円
『葬送のしおり』 長井龍遺著 30円
『わが心の釈尊伝』 須田道輝著 1,800円
修証義読本『生老病死』 須田道輝著 500円★
『曹洞宗檀信徒経典』 須田道輝解説 300円★
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』 霊元丈法著 140円★
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』 霊元丈法著 150円★

*『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

曹洞禅グラフ

Table with 2 columns: 発行日, 内容. Lists issues like 春 彼岸号 (2月20日), 夏 お盆号 (5月30日), etc.

Table with 2 columns: 部数, 価格. Shows pricing for 1部 (200円) and bulk orders (9部以下 200円, 10部以上 150円に割引, etc.).

お申込み

〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5
TEL: 042-703-8641 FAX: 042-783-0989 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

仏教企画

※ご寺院名後の番号(3桁もしくは4桁)がお客様番号(コード)になります。お申込みは ①ご寺院名 ②お客様番号 ③電話番号でも可能です。

編集後記

「臨床宗教師」講座の意義について、宗門側から増田友厚、藤田一照、久保田永俊の各氏と、「臨床宗教師」会の会長で上智大学教授(東大名誉教授)の島蘭進氏、同副会長の金田諦応氏との座談会を開きその内容を今号で紹介している。

朝日新聞(平成29年1月24日)朝刊には「僧の質を高めよ世間知る研修」と題して、特集記事が組まれていた。宗門では宇治の興聖寺、福岡市の安国寺での坐禅会のこと紹介され、曹洞宗では55歳以下の住職にボランティアなどの社会貢献に関する講義も取り入れて僧侶教育に力を入れていること、他宗では浄土宗、浄土真宗本願寺派の取り組みが紹介されている。

記事の中で弓山達也・東工大教授(宗教学)は「無縁社会や孤独死が顕著になり、東日本大震災では慰霊や追悼の重要性が再認識され、宗教的儀式だけをやっていけばいい時代は終わり、縁をつなぐ僧侶だからこそできる役割を見直し、なぜ必要なのか問われる時代になった。僧侶の教育は宗派宗教の枠を超えて学びあったほうがいい」とコメントしている。

平成29年1月号の「曹洞宗報」では島蘭進氏が「仏教からの発信が求められている」と題して「今、必要なのは現代世界の難問をよく知り、

しっかり受け止め、重厚な発信を行っていくことである。世界はそのような発信を首を長くして待っている」と述べられているのでお読みの方も多いかと思う。

私達僧侶の役割は時代とともに変化していることをまず感じ知らなければならぬ。私の自坊は福井県の第3教区にある。1月29日に49日の法要があり20人ほどのお参りがあった。この地域では施主家で法要があり、そのあと後席が設けられるが、般若湯をいただくながらいろいろな話が出る。トランプ大統領、中国問題、日本の農業政策、地元の町長選など実いろいろな話題が出て実のある時間だった。お檀家とのこのようなお付き合いは全国にある光景かと思う。仏事が中心になつて人々とのいい付き合いがここにはある。檀家制度のいいところは大きい生かしている。しかし、その一方で世間苦にどう向き合うかも我々が真正面から取り組むべき課題である。シャンティ国際ボランティア会の設立に大きな役割を果たされた故有馬実成氏が一カ寺一事業を提唱されたことを思い出した。有馬さんは今の現状をすでに予見されていたのかと思う。

仏事にプラスして寺院と地域社会との関係性が共有出来るものは何だろうか。その答えは世に出なければ解らない。人々は僧侶が世(地域社会)に出てくることを待っているならば、私達はスキルを上げて世に出て行くにはありませんか。

臨床宗教師講座の内容には学ぶべきものが多くあり、全国各地で私達のスキルを高めてくれる講座が多く展開されれば、寺院と地域社会を結びつける大きな力になってくるに違いない。

東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄付講座は寄付金によって成り立っている。平成24年から始まった寄付講座は1年間2500万円の寄付が必要との事、今までは立正佼成会、WCRP(世界宗教者平和会議日本委員会)、キリスト教関係団体など多くの篤志によって支えられてきた。既成仏教界は余り寄付には積極的ではなかったようだ。

平成29年度まではどうにか寄付が集まり講座が続けられるようだが30年度はまだ集まっていけないとのこと。関係者はあと1年続けば寄付講座から、正式な講座(基幹講座)になると訴えている。国立大学に「臨床宗教講座」が開かれるようになるのは大変意義あることではないか。その実現のために私も貧者の一灯をさせていただく予定だ。

